

令和 5 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4091700064		
法人名	有限会社森の母屋		
事業所名	グループホームはなれ		
所在地	福岡県直方市上境2614-3		
自己評価作成日	令和5年11月6日	評価結果確定日	令和5年11月22日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリズん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和5年11月16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

日中は訪問看護ステーションの看護師が様子観察に来所します。また利用者が容体急変時は看護師がすぐに対応でき、連携している医師とも連絡をとり指示を仰ぎ、適切な処置を施す事が出来ます。施設の窓からは、福智山系が一望でき季節の移り変わりを目と肌で感じられます。施設の庭には畑を作っており季節ごとの野菜の収穫を見ることが出来、収穫した野菜は日々の食卓に並びます。特に夏はスイカ割、秋はさつまい芋を収穫します。一昨年はインシにさつま芋ほとんど食べられてしまいました。しかし昨年より芋畑の周りに柵を作り、今年は被害なく収穫できました。今年はコロナ感染症が5類に分類されましたが施設として外出は控えています。しかし施設の広場又は駐車場にて桜の花見会(バーベキュー大会)、コスモスの花見、秋の収穫祭(バーベキュー大会)を開催しました。

開所以来朝礼で継続している理念の唱和は、初心に戻る好機となっている。「食べる事は生きること」と、園庭で焼き芋やバーベキューを楽しむ、日頃は目で楽しみ味わって楽しむ季節感のある食事を提供し、完食した入居者に母体訪問看護ステーションの所長が「ありがとう」と声をかけ、完食状況をラインで家族に報告している。地元出身の代表は生活歴などを熟知している入居者も多く、「本当は家が良ければ、ここでも仕方がない。」との思いを受け止めながら、穏やかな暮らしを支援している。この1年は看取りはないが、看取った方の初盆に参列し、一昨年からホームで慰霊祭を行うなど、グリーフケアを実施している。正社員が多いが、清掃や調理専従、家族の介護、治療を受けながらなど、夫々の状況や希望に応じた勤務体制で、理念の「慣れ親しんだ地域で、いつでも笑っていたい、自分らしく生きたい」を具現化した地域密着型サービスを展開している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名 **グループホームはなれ**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は玄関の壁、スタッフルームに掲示している。朝礼時、理念を唱和し、利用者個々の生活環境を尊重し、日々の実践に取り組んでいる。職員は介護に専念できる環境で、職員同士互いに尊重し合い、チームケアを実践している。	開所以来朝礼で継続している理念の唱和は、初心に戻る好機となっている。清掃や調理に専従する職員を雇用し、理念の「いつでも笑っていたい、自分らしく生きたい」を具現化する入居者本意のケアに取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の自治会隣組入会している。今年度まで地域の自治会は行事をほとんど中止している。	代表が自治会主催の年2回の清掃に参加しているが、盆踊りは公民館や神社のみで開催されるなど、地域行事を自粛している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今は、地域貢献出来ていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、地域の方、利用者の家族に参加してもらい、当事業所の実態を報告し、出席者より意見や要望を出していただいている。運営推進会議の議事録はスタッフルームにて誰でも閲覧できる。	運営推進会議はウッドデッキで家族や地域代表、バックアップ施設代表などの参加で開催され、入居者や運営状況を報告し会議録を整備している。次回は系列ホームの会議で好評を得た季節感溢れる献立を紹介し、参加者から意見を伺いたいとケアマネージャーは話している。	定期的に発行しているホーム便りで、運営推進会議の開催日時や会議録の公表について案内するなど、意見の表出を促す工夫で、更なる運営推進会議の活用を期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市とは、報告・連絡・相談等を電話や面談で行っている。	市からメールで問い合わせを受けた居室情報は、その都度返信している。クラスター発生時は関係部署に状況や対応の報告や連絡を行い、連携や協力体制に取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員全員が身体拘束を理解し、日中は玄関の施錠はせず、職員見守りで自由に屋外へ出ていけるようにしている。身体拘束・虐待の防止は定例会議にて、研修を頻繁に行っている。	定期的な身体拘束適正化会議や研修を実施している。身体拘束に関する具体的な内容を全職員に周知し、適切なケアに取り組んでいる。スピーチロックについても理解し、「待つて」の前に納得できる説明に務めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内では職員全員で虐待につながる行為がないか、確認を行い虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員には、会議にて研修している。利用者開始時には契約書等にて説明している。現在のところ成年後見制度の利用者はいない。	随時日常生活自立支援事業や成年後見制度の活用を支援するために、事業や制度に関する資料を整備している。入居数ヶ月間、後見制度を活用されていた方もあったが、現在は親族が支援している。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には、重要事項説明書について十分説明している。後日疑問に思われたことなどは、いつでも尋ねていただくよう伝えている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約書の中に苦情に対しての受付を表示している。利用者からの事業所での苦情や、家族からの苦情に対しては迅速に対応し解決を図っている。	遠方の家族も多く、ホーム便りや電話で暮らしぶりを報告している。LINEで行事の際の写真を個別に家族に送り、喜ばれている。家族から「必要な物はありませんか」と電話で問い合わせがあるが、特段の意見はない。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のミーティング、定例会議等で職員の意見を聞く場を設けている。	代表や母体の訪問看護ステーション所長の参加で月1回開催している定例会議は、ケアや研修、業務に関する話し合いの場となっている。物品の購入は必要時に提案することが殆どで、掃除機や洗濯機が購入されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与等に反映される査定や人事考課は実施し、毎新年度の4月分からベースアップにつなげている。介護福祉士等の資格を取得するための、研修・勉強会等には優先的に公休、有休を与えている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の募集・採用にあたっては、性別や年齢等を理由にして採用はきめていない。	ハローワークなどを通じて30代～70代の男女の職員が入職し、正社員が多く、県主催の技術向上研修の参加で人材育成に取り組んでいる。クラスター発生時は泊まり込みで対応した職員もある。調理や清掃に専従したり、家族介護を担う職員も多く、治療を受けながら勤務する職員は「入居者に元気をもらおう」と話すなど、夫々の状況や希望に応じたシフトで、助け合いながら勤務している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	職員等に対する人権教育・啓発活動には研修を通じて取り組んでいる。	入居者だけではなく職員の人権を擁護するために倫理感や法令遵守に関する資料を読み合わせたり、ハラスメントに関する研修を実施している。入居者は〇〇さんと姓で、同姓の場合は名での呼称を申し合わせている。	職員の人権を擁護するために、法人としてカスタマーハラスメントに関する方針の整備や研修の開催を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年、県の介護職員技術向上研修に2名参加している。定例会議にて又は、その都度看護師とトレーニングしている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者とのネットワーク作りや、勉強会は現在行っていない。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用相談を受け、初回来所時には利用者を尊重し、本人の困っていること、不安な事や要望などを、表情や行動を観察しながら、傾聴できる場の雰囲気、関係づくりに努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の方が電話や来所された時には、困っている事、不安な事、求めている事をよく傾聴して施設の目的や機能、実施している事などの説明を行い家族の要望等を伺いながら、関係づくりに努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族の思いや要望を把握して、施設の介護の特性や他施設の特性などの状況提供を行い、必要なサービス提供を支援している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の思いに寄り合いながら、日々の暮らしの中では、天気の良い日には一緒に散歩に出かけ。洗濯ものは一緒にたたみ、ゲーム・体操等は職員と一緒にやり、作品作り塗り絵等出来た時は達成感を皆で共有し互いに支え合う関係を築いている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	施設での生活の中で出た不安や要望を家族に伝え、家族に協力して頂くことで共に利用者を支える関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会者等が来所された時は、外デッキにて話ができるようにしている。利用者本人の馴染みの場所等に行くことの支援は出来てない。	面会はウッドデッキのガラス戸越しで、人数や時間を制限してお願いしているが、頻回に面会に訪れる家族もあり、共同生活の場として方針の周知徹底を検討している。毎月姪御さんから届くハガキを母体訪問看護ステーション所長がハガキ入れを作り保管するなど、関係継続を支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の相性等を見きわめ、相性の良い利用者同士を近づけ、独りになることを防ぎ利用者同士の関係の強化に努めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	施設で亡くなられた方の家族とは、これまでの関係を大切にしながら、支援に努めている。今年も初盆会に参列している。施設では盆前に慰霊祭を行っている。(光福寺住職による)		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人ひとりと会話をし、希望や思いを把握できるようにしている。	認定調査項目に沿ったアセスメント結果を整備し、日頃の関りから思いや意向の把握に努めている。地元出身の代表は、生活歴や職歴、家族構成を熟知している入居者も多く、「正月は家に帰れるか」や、「本当は家が良いいけれど、ここでも仕方がない。」との思いを受け止めている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	情報を共有し、暮らしの変化を感じさせないように努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	スタッフ間で一人ひとりの日常生活の情報交換を行っている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月末にチェックシートに評価を記入する。チェックシートも参考にして、現状に即した介護計画を作成している。	担当者会議前に電話で家族の意向を確認し、日々チェックしたケアのモニタリング結果を会議で話し合いながら、現状に即した介護計画の作成に努めている。転居された方の「馴染みの所が良かった」が「家に近いから良い」となるなど、穏やかな暮らしを支援している。	入居者が意向を表出できることをストレンクスと捉え、総合援助方針に代表や職員と会話を楽しめる関係づくりの記載を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録に一日の様子を記入し、朝・夕に申し送りを行うことで、利用者の変化に対応を職員間で共有しながら実践に生かしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	施設内では柔軟な支援に取り組んでいる。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今年も、地域資源を使つての支援は出来てない。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	2週に1回、利用者本人の症状に合ったかかりつけ医（神経内科または呼吸器系内科）の往診時に、日々の変化を伝えることで、適切な医療を受けられるように支援している。	母体の訪問看護ステーションが医療連携ノートを活用し、かかりつけ医の定期的な往診や受診を支援している。かかりつけ医からインフルエンザと新型コロナウイルスのワクチン接種を受け、必要時のみ訪問歯科受診を支援するなど、適切な医療受診が継続している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	バイタル測定や利用者本人の様子がいつもと違う時には、訪問看護のナースに報告し、対応して頂く。（訪問看護ステーションは同一敷地内で誰かが常駐）		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院の先生やソーシャルワーカーとの連携を密にとり、入退院の打ち合わせや状態の把握に努めている。早期に退院しても病院の先生の特別指示書等により訪問看護が対応している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「重度化した場合・看取りに関する指針」を作成する。利用者家族、介護職員、管理者、かかりつけ医、訪問看護の連携にて取り組む。	入居時や状態に応じて、重度化や終末期に向けた方針を説明し、家族の随時面会や宿泊も支援できる環境を整備している。この1年は看取りはないが、看取った方の初盆に参列し、一昨年からは盆前に代表が門徒の寺の住職にお願いしホームで慰霊祭を行うなど、家族だけでなく職員のグリーフケアを実施している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急事態発生時のマニュアルはあるが、実施訓練を定期的には行っていない。しかし、実践にてその都度訪問看護と適切に対応している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域(上境)の消防団とは協力体制を築いている。消防団長とは時々情報交換をしている。	避難訓練では、水消火器による初期消火や入居者を外の駐車場に誘導する訓練や、地元消防団による放水も行われている。食料品や感染予防グッズを備蓄し、法人として策定するBCPを雛形として、ホーム独自のBCP策定に取り組む予定である。	昨年の新型コロナウイルス感染のクラスターを乗り切った経験を十分に活かしたBCP策定を期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の方々には人生の先輩であるという尊厳の念を持って接している。個人情報やプライバシーの確保は職員間で情報交換を行いプライバシーに配慮した対応に心がけ、実施している。個人記録に関しては施錠できる場所に保管している。	氏名で呼称し、耳元で穏やかな声かけを励行している。排泄が尊厳に連動する行為と熟知し、トイレのドアの開閉に配慮し、オムツ交換時は居室の窓のカーテンを閉めるなど、プライバシーに配慮したケアに努めている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来る限り利用者本人から希望を聞き、本人の意思決定によりサービスを実施している。また理解力に合わせての説明を行い支援している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にして、利用者の希望に沿って好きなように過ごして頂いている。レクリエーションへの参加等は無理することなく本人の希望に配慮して、柔軟な支援を行っている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	以前から着ていた服や、使用していた化粧品・装飾品等は自宅から持参して頂き、利用者本人の好きな身だしなみやおしゃれができるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在、食事作りは集中厨房で行っているの で、食事作りに参加していない。施設の畑で収穫した野菜は利用者に見せて、これが今日の食事のおかずになりますと言っている。毎月1日は赤飯、誕生会はちらし寿司、芋づるの煮物、大根葉の漬物、菜の花の和え物、ひな寿司等行事や季節感を感じることが出来る食事に心掛けている。	「食べる事は生きること」と、完食した入居者に訪問看護師が「ありがとう」と声をかけ、完食状況をラインで家族に報告している。食卓用の椅子への移動や移乗を介助し、目で楽しみ味わって楽しむ季節感のある食事を提供している。胃瘻を造設している方にも経口摂取を支援し、持ってもらったスプーンに食材を載せ、タイミング良く口まで運んでもらうなど、夫々の状態に応じた食事介助が展開している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分確保は個人記録にその都度、量を記録し、1400cc摂取を目安とし、利用者により調整している。食事は利用者に合わせて加減している。特に疾患のある利用者には状態に合わせて工夫している。ティタイムは紅茶・コーヒー・日本茶・牛乳等日々アイテムを替えている		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアは行ってもらい、うがいもしてもらい、入れ歯をきれいに洗えるように声かけを行ったりしている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンの把握を行ない、排泄の失敗を少なくしている。	排泄が自立している方もあるが、日中はトイレでの排泄を基本として、夫々の排泄パターンに応じてトイレに誘導している。紙オムツ使用の方の居室のクローゼットには夫々に応じて選択したパットやオムツが整理整頓され、入居者や職員の負担を軽減している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳飲んで頂いたり、刻み食にしたりなど、個々に応じた予防を行っている。便秘の兆候があるときは、訪問看護と相談し、指示を受けている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	開設当初は、一人ひとりに合わせて入浴を行っていたが、現在は曜日・時間を決めて行っている。月・水・金が入浴日。7月・8月は日曜日以外毎日入浴。火・木・土は足浴。	下肢筋力の低下や膝関節の拘縮のため、8名がリフト浴を使用している。入浴順番や同性介助の希望はないが、入浴を億劫がる方には声かけを工夫している。入浴や足浴、月2回の上履きの洗いで、足部の保清を実践している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後のひと時などソファで休息、昼寝などしている。居室での休息を希望すれば、居室へ誘導している。夜、就寝する時はいつも着ているパジャマに着替えて、自宅と同じようにリラックスしていただけるようにしている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の目的や用法、用量について理解し、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。各利用者の薬の仕分けは訪問看護のナースが毎日行っている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	歌を歌ったり。洗濯ものをたたんで頂くなど生活歴に応じた役割や気分転換を図っている。時にはおやつは、デッキで午後は紅茶気分。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	病院受診は職員が支援している。時には家族が来所して病院受診を行うこともある。	昨今の状況から、医療機関受診以外の外出を控えている。駐車場から傍の堤や畑の桜や秋桜の花見をしながら、バーベキュー大会を楽しみ、来月は法人全体で隣接する小規模多機能事業所でクリスマス会を行う予定である。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者本人は全員お金を所持していません。外に出かけアイスcream等を食べる時も職員がお金を管理している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者本人が電話をしたいという申し出は今のところない。家族に電話して会いに来るように言っているとされた時は、すぐに連絡を取っている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には季節感のある花などを置き、居間のカウンターには季節ごとの置物を飾り、季節感を取り入れている。室温は温度計と利用者の要望で調整し、加湿空気清浄機を使って室内を居心地良く過ごせるように工夫している。室内は利用者の青春時代の歌や童謡、クラシックを流している。	門扉を入ると何種類もの季節の野菜が丹精込めて栽培され、玄関傍の屋根付きのウッドデッキはテーブルや椅子が置かれ、運営推進会議や居間のドア越しでの面会の場となっている。共用空間は空調管理や清掃が行届き、厨房をコの字型に囲んだカウンターテーブルを囲んで食事を摂り、大型テレビ前の椅子で午後うたた寝をする入居者もあった。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人掛けのいすを対面式にならべ、全員が一緒に座られる。一人でいたいときは、黄色のソファに座られている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が以前使っていたタンスや小物・飾り物を居室に置き、少しでも居心地良く過ごせるようにしている。	居室入口は家族持参の長短様々な暖簾が掛けられている。ベッドやクローゼットが備え付けられ、筆筒や椅子、テレビを持ち込み、壁のボードには推しのアイドル写真や誕生日カードが飾られたり、遺影にお水を上げられる方もいるなど、夫々心地よい居室となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下、フロアにはものは置かず利用者が移動しやすく、トイレは廊下に3つ、フロアに1つ配置し本人が気に入ったトイレを利用している。		